２０２５ジュネーブ国連研修報告　～参加生徒感想より～

【研修全体を通しての感想】

今回のジュネーブ国連研修では本当にたくさんの学びや発見があった。ジュネーブの街には美しいレマン湖やヨーロッパ風の綺麗な建物があり、日本では見たことがないくらいたくさんのバスや路面電車が走っていた。人々が笑顔で英語やフランス語で話しかけてくれ、国際都市としてさまざまな国籍の人を受け入れてきた寛容さを感じることができた。最初に行ったCERNでは、世界最大の粒子加速器について展示やVR体験を通じて学んだ。粒子加速器がジュネーブとフランスにまたがっており、山手線と同じくらいの大きさであるという話にはとても驚かされた。さらに、VR体験で見た加速器の大きさと精密さは圧巻だった。ジュネーブという国際都市で研究を行うことで、研究に必要な国際協力をスムーズにできるようにし、一国では成し得ない研究成果を挙げているのだと考えた。私は理系を目指しているが、理系の最大の研究機関であるCERNを見学して、理系研究においては知識を追求するだけでなく協力体制も重要となってくるということを実感した。２日目にはまず、UNHCRを訪れた。特に印象に残ったのは、難民の受け入れが多いのは主に低中所得国であるということ、あまり報道で取り上げられていない紛争問題には支援が集まりにくいという話だ。経済的に豊かで、国際的に影響力もある先進国が、自国益だけでなく国際益を鑑みていくこと、報道が世界中の紛争にスポットライトを当て、私たちが積極的に問題を知って自分ごとと捉えていくことが今後の課題になると考えた。YMCAでは、若者の力の重要性を学んだ。自分も若者の１人として世界の問題に真剣に向き合い、アクションを起こすことが大切だと知った。ジュネーブ旧市街の散策では、宗教改革の舞台として果たした役割や、古くから難民を受け入れてきたという、現在の国際都市としての姿の背景にある歴史を学ぶことができた。残念ながら天気は雨で、晴天の下のレマン湖を見ることはできなかったが、ヨーロッパならではの文化を楽

しむことができた良い経験になった。３日目のアヌシー観光では、初めて陸路で国境を越えるという経験をし、ヨーロッパ同士の繋がりの強さを感じることができた。サンピエール大聖堂を訪れ、カトリックとプロテスタントの文化の違いを実感できたのは特に印象深かった。国際赤十字•赤新月博物館では、行方不明者の記録や紛争地域での支援の様子を見たり、証言者の声を聞いたりした。過去、そして現在も紛争や災害で亡くなる人、家族を失う人がいるのだということを改めて感じさせられた経験だった。また、医療関係の職に興味がある私にとって、赤十字•赤新月社の「国籍、性別、民族、敵味方に関係なく、生命を守る」という人道支援における精神を学べたのはとても貴重で大切な経験だった。4 日目はまず国際連合欧州本部を訪れた。実際に大きな会場で会議が行われている様子を見て、昨年度行った模擬国連では分からなかった臨場感やオブザーバーの役割などを学ぶことができた。近年、大国間での対立が深刻化する中、国際連合ではどのように合意形成に至っているのか知りたいと思ったが、そこまで聞く時間がなくて少し残念だった。WHO の訪問では、疾患の支援やエイズについて、職員の仕事について学んだ。効率的に必要な支援を提供するために、世界中の局と連携システムを確立しているということがわかった。また、アメリカの支援が打ち切られたことで問題が深刻化しているというお話を聞き、大国の影響が及ぼす問題を実感した。特に印象に残ったのは清水さんのお話だ。公衆衛生という専門性を活かして、さまざまなバックグラウンドの人が集まる WHO という場で、世界中を飛び回りながら自分の大きな目標を叶えるために国際的に貢献できるというのは非常に魅力的だと感じた。医療分野に進もうと考えながら、国際的に働くことにも興味がある私にとって、進路決定の上でとても役に立つお話を伺うことができた。最終日には、国際人事コンサルタントの小島さんのお話を伺った。国際機関で働くためにはコミュニケーション能力や言語力、適応力、粘り強さなどさまざまな能力が必要であることがわかった。さらに、国際機関で働くための具体的なキャリア設計も知ることができ、今回のお話を忘れないようにしたいと思った。今回の研修を通して、現在の国際社会では大国が強大な影響力を持っているということを

実感した。特に、トランプ政権が自国益の優先に舵を切ったことで WHO や UNHCR、また今回は急きょ行くことができなくなった WTO は財政状態が逼迫し、支援を供給できなかったり、合意形成に至らなかったりと多大な影響があることを学んだ。私たちは一人一人が国際問題を自分ごととして捉え、国際益を鑑みていく必要があると強く感じた。また、医療系の分野で国際的に活躍したいと考えていた私にとって、国際機関で働く人々のお話を聞いたことで、医療という専門性を活かして国際機関で働くという選択肢が生まれ、そのために必要な能力やこれからどうすべきかというビジョンが明確になった。これからは、医療と国際で自分が本当にやりたいことをじっくり考えて見つけ、それを目指して進路を決定していきたい。（4 年生徒）

【学んだこと～訪問地別】

CERN

『CERN とは欧州原子核研究機構の略称で物理学における世界トップレベルの研究を行っていると知った。特に素粒子などの最小単位の物質について研究しており、宇宙の起源や進化の解明を目指していると知った。1954 年に設立され、欧州の国々等が参加している。CERN で研究した博士などがノーベル物理学賞を数度受賞している。ここでは思ったよりも大きな機械や実験を行っていたので驚いた。実寸大の模型もあったため大きさを実際に確かめることができた。宇宙の起源や進化について研究していることに興味が湧き、わからないことを探求することの大切さを学べた。地下に実験の機械があることや EU 以外の国も CERN に加盟していることもいままで知らなかったので新たな発見となった。実験や宇宙の原理、素粒子について楽しく学べる遊び場所などもあったため、わかりやすくそれらについて学ぶことができた。思ったよりも大きな組織だったので日本やアジアも負けないように協力して研究を進めるべきではないかと感じた。』（3 年生徒）

UNHCR

『UNHCR での講義では、UNHCR は必要とされる限りどこへでも行くこと、職員の多くが現地で働いていることなどを知り、並々ならぬ覚悟で活動していることが分かりました。その他、世界では各地で紛争が絶え間なく生じていて、人々の記憶から忘れ去られた紛争も

多くあることを知り、衝撃を受けるとともに、日本で「普通に」暮らしている幸せについて考えさせられました。また、難民条約に批准している国は難民を受け入れなければならないことや、3 つの NO（差別しない、罰則を与えない、送り返さない）について学び、日本は難民の受け入れについて消極的なのではないかと考えました。難民として国外へ渡る人がいる一方で、病気を抱えていたり、交通路の問題があったり、小さい子どもがいたりするために国内に留まる国内避難民や、身分を証明できずに何をすることもできない無国籍者が多くいることも分かりました。講義全体を通して、多くの人が愛する母国を追われていることに衝撃を受け、崇高な覚悟でそのような人たちを支援している UNHCR に対して大きな敬意を抱きました。』（4 年生徒）

『UNHCR では難民支援について学んだ。事前準備で知識を入れていたこともあり、英語でのプレゼンだけでもかなり理解できて楽しかった。このプレゼンの中で、予算不足の問題が印象に残った。必要な経費のうち、国連本部から支給されるのはほんの一割ほどであること、資金を半分ほどしか調達できていないことがわかった。プレゼンをしてくださった方は、普段民間企業からお金を集める仕事をしていらっしゃるそうで、実際にプログラムを動かす職員だけでなく、お金や物資を集める職業も非常に重要だということがよく分かった。また、先進国よりも途上国の方が、難民の受け入れに積極的であることがわかった。その原因として、紛争が起こった国の近くには途上国が多いことや、(これは職員の方の推測だが)自分たちの国でも紛争が起こりうるため、その時に自国が助けてもらえるようにしたいという思惑があるそうだ。先進国の方が財政的にも余裕がある上インフラも整っており生活はしやすそうだが、主にヨーロッパやアメリカに多い先進国で、受け入れ国住民と難民が互いの文化を受け入れるのが難しいことや、先進国が難民受け入れに消極的な政策をとっていることが原因で、先進国の難民受け入れは比較的少ない（一方で、文化、地理的に近いウクライナ難民を多く受け入れるヨーロッパ先進国は多い）ということがわかった。難民の人権を擁護することが最優先であっても、難民受け入れをどの程度するかは受け入れ国次第なので、その折り合いをつけるのがとても難しいと感じた。また、難民が自立して受け入れ先で暮らしていけるよう、その国に合わせた支援をしているという。その一方で、難民キャンプは、どこにも行くあてがない無国籍者を守るための最後の手段であり、持続可能でないためできるだけそのようなケースを減らした方が良いという。戸籍の制度のせいで無国籍になってしまう人々が多いらしく、これも、難民受け入れと同じでその国の内政が関わっているため、根本的な解決に漕ぎつけるのが難しそうだと感じた。各国の政府や、それを選ぶ国民自身が、難民の命との最低限の生活を優先事項とし、多少利益については妥協していかないと状況は良くならないのかなと考えた。』（4 年生徒）

YMCA

『今までYMCAに関しては何の知識も持ち合わせていませんでしたが、今回、何百年にもわたって世界中の若者を様々な面で支援していることを学びました。特に印象に残ったのは、第二次世界大戦期の説明で述べられた「Red Cross saved my life, YMCA saved my soul.」（赤十字は私の命を守ってくれた。YMCAは私の心の拠り所を守ってくれた。）という言葉です。現代の社会では多くの人が心の問題を抱えていますが、そんな「心」に寄り添って活動しているYMCAは必要な組織だと感じました。』（４年生徒）

ジュネーブ旧市街散策

『ジュネーブ旧市街では歴史についてのお話を聞きながら街を歩いてまわった。ジュネーブの歴史については予習してきたが、改めてジュネーブが古くから多様性を認める寛容な都市であったことや、サヴォアの圧政に断固として抵抗した市民がいたことがわかった。プロテスタント宣言をした広場やプロテスタントの特徴を持つ教会、カルヴァンの椅子など、宗教改革に関わる様々な建造物を見ることができた。ジュネーブで時計産業が発達したのはフランスからユグノー難民を多く受け入れたからであるという話を聞き、当時は少数派・異端であった人々と共存することで得ることができた恩恵もあるんだなと、興味深く思った。』（４年生徒）

アヌシー観光

マルシェで、日本に家族がいるというおばあちゃんと少し話した。フランス語は全然わからなかったが、単語がいくつか聞こえたのでなんとなくリアクションはできた。古本置き場があり、自由に本を取って行っていいそうで、私も2冊持ち帰った。古本置き場、日本にも欲しい。アヌシー湖は聞いた通り水がとても綺麗だった。運河として使われていた川沿いに店が並んでいた。今年の春にイギリスへ行ったが、イギリスとは建物の様子が全く違った。この建築様式の違いも後で調べてみたい。アヌシーとジ

ュネーブには、同じ名前の「サン・ピエール大聖堂」があり、宗教改革期にカトリックの司教が、ジュネーブからアヌシーの聖堂に逃げてきたらしい。また、サヴォア家関連でもジュネーブとアヌシーには繋がりがあり、二つの街は近くにあっても立ち位置が全く違っていて面白いと感じた。（4年生徒）

赤十字・赤新月博物館

『赤十字・赤新月博物館では、「全ての人々を分け隔てなく救う必要がある。」という明るいことだけではなく、死者の捜索・照合や、遺骨の返還といった心が痛くなるようなことについても学びました。私たち日本人は、日々日本で生きていて「死」を実感することはほとんどありませんが、ここではそういったことが隠されることなく赤裸々に展示されていました。博物館の見学を終えて、いかなる状況でも人間の命・尊厳を守るという理念に改めて感動し、その理念を達成するために赤十字は実際にいかなることもしているということが分かりました。』（4年生徒）

『赤十字・赤新月博物館では、証言者の方々のお話を聞くことができたり、本物の資料やリスト、実際に使われた道具や衣類などを見ることができたりしました。ある捕虜たちのデータファイルから見本と同じデータを探すというコーナーでは、友達と2人で協力して探したのですが、15分程度かかってしまい、大変でした。アンリ・デュナンについても詳しく学ぶことができ、彼の生家を旧市街散策で見ることもできました。私はこれからもアンリ・デュナンの信念を心に留めて生活していきたいです。』（4年生徒）

『ルワンダでの虐殺やコロンビアでの内戦などが展示で取り上げられていたが、それらについてあまり知らなかった。目立って世間に噂されることにしか目が向かないのは良くない、気をつけなければならないと感じた。戦争などが起こった時、医療などの支援だけでなく、家族とコンタクトをと手段を提供することも、大きな支援となることがわかった。コロンビアで人質になった人への家族からのメッセージをラジオで放送した当時のものを聞いた。私たちは戦争や物騒で過激な団体を実際に見たことはないが、それを経験している人の声を聞くと、よくない現状をリアルに感じた。』（4年生徒）

国連本部

『国連欧州本部と国連の本部の役割の違いがわかった。実際に会議室を見たり、オブザーバー席にも座ることができたので国連の会議について身近に感じることができた。いろいろ

な視点から意見を集めてじっくり話すという考え方がみんなが納得できる案を作るにはとても大切だなと感じた。欧州に 2 つの国連のオフィスがあり、南アメリカやアジアにないのは少し驚いた。最近はアメリカの拠出金減少で国連機関の統廃合や最低賃金の低い国への移転が計画されているのでアジアの先進国で設備が整っており、地価や人件費も国際的に見て安い日本に一部の機関を移転させるのが良いのではと感じた。』(3 年生徒)

『複数の場所で教えていただいたびっくりしたことは、国連は完璧な機関ではないということです。私は日本にいる時、国連がなんとかしてくれる、国連は最強であるなどと思っていました。しかし、国連には権力にも活動規模にも制限があり、国連ですぐに合意形成を図ったり、解決したりするのは難しいことであるとわかりました。また、小回りがきくのは NGO の団体で、災害や戦争が起きた時、すぐに駆けつけるのは国連の方々ではなく、NGO の方々であることも知ることができました。このような複数の機関が連携・協働することで、現地を救っていることがわかりました。』(4 年生徒)

『今回の研修では、普段なら体験できないような経験をたくさんした。国連は世界規模で活動する、遠い存在のように思っていたが、意外にも紆余曲折しながら試行錯誤を繰り返しており、日本人の方々も活躍しているという点で身近に感じ、新たな発見だった。特に印象に残ったのは、将来の道について、高校生や大学生になってからやりたいことが見えてくることもあるし、社会人になってからも夢を追いかける人がいるということだ。私もまだ目標が定まらずにいるが、自分自身を分析するところから始め、本当にやりたいことが何なのか改めてじっくり考えるきっかけにしたいと思う。また、研修を通して、友達と会話の中で開発や戦争などについて意見を交わすうち、根本的に意見が食い違う人もいることを学ぶ機会になった。社会・共産主義は悪で、資本主義が正義のように思ってきたが、そうとは限らないことに気づいた。今後は自分の中で正しいことも広い視座で見直し修正していけるよう、人の意見を聴く力も大切にしたい。』(3 年生徒)

WHO

『ここでも予算不足が問題として挙げられていた。アメリカが支援を打ち切ったことで何百万もの人が被害を被ることが明確に示されたことが特に印象に残った。私たちも、外国にいる命すらも危うい人々を顧みずに自国の利益のために支援を減らそうとしてしまうことに心あたりがあるので、自国の利益でなく、他国の国民だとしても人命と最低限の生活を迷いなく最優先にしなければならないなと思った(しかし現実ではそうもいかない…)。また、UNHCR でも、「継続して紛争が起こっているが、知名度が低いので寄付が集まりにくい紛争」があると聞いたが、ここでも「neglected tropical diseases 」という、あまり知られていない課題もあることがわかった。目立っていたり、今タイムリーに目を引いたりするような

課題だけでなく、地味だがずっと継続しているような課題にも、自分で調べて気づき、根気強く向き合わなければならないなと思う。今、ウクライナでの戦争もガザの人権問題も、視聴率が取れないからかメディアがだんだん取り上げなくなってきたが、そのようなものにも注意していきたい。また、国際機関で働くことは目標ではなく手段であるという話も、その通りだと思った。将来の夢として職業を挙げるのはお決まりだが、その先を見据えて自分が実現したい理想のようなものを段々と持てたらいいと思った。』（4 年生徒）

『WHO への訪問において、多くの日本人が、日々生じる感染症や災害などの危機に対して動いていることが分かりました。また、WHO の本部にいる人も、かなりの頻度でケニアや東ティモールといったフィールドでの活動をしていることを知りました。それに対する恐怖はないのかという質問に対して、お話をしてくださった方はないとおっしゃっていました。その方は、WHO にいることは、自分の「地域のリーダーとなってオペレーションを指揮する」という目標の手段にしか過ぎない、とおっしゃっており、私たちも、何かの職業に就くことを目標にするのではなく、何らかの信念をもち、それを達成する手段として職業につくべきだ、という考え方を学びました。そのような人生の基準となる大きな目標があるからこそ、フィールドでの活動に対しての恐怖よりも、わくわくする気持ちのほうが大きくなるのではないか、と思いました。』（4 年生徒）

国際人事コンサルタントによるレクチャー

『6 日目は国連人事の小島さんのお話がありました。小島さんは様々な国際機関に勤めた経験があり、どのようにしたら国連機関に入れるのか、問題が起きた時に考える力などをディスカッションで考えさせられました。インターンをするといいことを知って、どのインターンがいいかも詳しく教えてもらえました。実際に人事の方に聞くのはとても有益な情報をいただけたと思います。今現在特に国連機関に勤めたいという希望はないですが、誰かの役に立ちたいと考えているのでインターンに行ったら何か考えが変わるかもしれないので行くのを考えて見ようかと思いました。国連職員の中でも専門職、一般職、フィールド職と色々な立場の人がいることを知りました。採用に様々な基準があるのでそろそろ将来の夢をちゃんと決めて後悔のないように大学、学部選びをしたいと思いました。』（4 年生徒）